

●「北海道の学校事務」の現在・過去・未来

〈第 5 回〉



持田理論・人と人との切り結び〈下〉

『Dataというものは、何を意味するのか……』といえ、その底にある人間の労働あるいは実践・生活とこれが切り結んでいく諸関係というものがあられるわけです。こういうものを外化する、外側へ出す、もの化したもの、これがDataである。だとすると、Dataをどう処理していくのか……ということを考える時に、その底にある人間の生きざまというものを問題にしないといけないわけです。

この人間の生きざまを問題にしていけば、当然、学校において帳簿を管理するということは、その底にある教育的なその学校におけるさまざまな人たちの生きざまということとかわって、問題にしていかなければ、「事務的」という言葉が意味している非常に味気ない、血のかよわない、冷血動物的なそういうところへ移ってしまうわけであります。

事務というものは、その底にある人間の生きざまのかかわりにおいて捉えられなければならないということは、何も教育のことだけに限っていいることではなくて、教育事務だけが結構な世界だなどということはないんだ……とこういう議論になってくるわけです。そういう意味で、私は、事務を一般事務に解消してしまう考え方にも反対であると同時に、教育事務だけが独りよがりきれいな世界だなんていっているのも反対である。

お前のいっている教育事務とは何かといえ、学校という場所にわれわれは生活しているわけです。だから、学校において、事務がどういう疎外関係を生んでいるのか……というこ

とを、学校事務というところを原点にして、その学校の在り方そのものを問いかえしていく。これが「教育としての学校事務」である……と私は答えたいと思うわけです。』

(1975年第25回全道事務研 持田栄一氏の講演より)

■「ありがとうございました」 ～子どもたちに寄り添う学校事務

情緒しょうがいを抱えたマイちゃんが入学したのは、私がその学校に赴任した年でした。

子ども同士のコミュニケーションが苦手だったマイちゃんは学級に馴染むことができず、教室にいたることができませんでした。授業時間も休み時間も職員室の私の机の横の空き机で、大好きなイラスト描きに没頭していました。その様子を見ていたある教員が、「さながらマイちゃんは北野さんの秘書だね」とマイちゃんを笑わせました。私も嫌な気分ではありませんでした。

そんなマイちゃんも時とともに、学級に慣れ、友だちもでき、職員室に来ることはほとんどなくなりました。私との接点も登下校の際や校内で会った時にあいさつをする程度になりました。私は日常生活や学校行事で、成長していくマイちゃんの姿を見るのが楽しみでしたが、自分からどんどん離れていくようで、寂しくもありました。

時は過ぎ、マイちゃんが3年生になったある日のこと、廊下ですれ違いざま、私に対し、「ねえねえ北野さん、聞きたいことがあるんだけど……」と尋ねてきました。それまで「職員室のメガネをかけた人」というのが、マイちゃんにとっての私の名前だ

ったはずなのですが、いつの間にかマイちゃんは私の名前を覚えていたのです。私は言葉にならないほど感動しました。

マイちゃんは入学時から群を抜いて体格がよかったです。5年生にもなると、大柄な私も簡単に抜かれてしまうほど体が大きくなりました。その分、児童用トイレで用を足すのも辛くなってきたようで、ある日の職員会議の際、「マイちゃんのために、児童用トイレの一部を広く改修してもらえないか」という提案が担任からありました。

施設設備係として窓口となった私は、早速教育委員会に事情を説明し、改修の要望をしたところ、簡単にOKができました。学校側の要望通り、和式便器2箇所分が洋式便器1箇所のスペースとなり、広さと快適さは申し分ありませんでした。しかし、予算を削った町教委は、ドアを薄手の簡易な



写真提供：富良野市立樹海小学校 校長 久守清志

アコーディオンカーテンにし、しかも鍵はありませんでした。

このままでは、プライバシーがまったくないような状態だったので、「もう少しなんとかなりませんか」と幾度となく要望しましたが、教育委員会は「いや～もう予算が……」という回答の一点張りでした。私は、トイレを利用するマイちゃんをはじめ、子どもたちの姿を頭に浮かべながら、「子どもたちの身になってくださいよ」と粘り強く再改修を訴えました。

最終的にはアコーディオンカーテン方式は変わらなかったものの、材質は当初に比べかなり厚手のものになり、鍵は頑丈なものがつきました。教育委員会の担当者からは何度か「何でそんなにがんばるの？」と聞かれましたが、その度にこう答えました。「子どもの立場にたって仕事をすすめるのが学校事務職員ですから」――。

マイちゃんも6年生となり、いよいよ卒業する日を迎えました。着慣れないブレザーが窮屈そうでしたが、卒業式での態度の至る所に成長の跡が表れていました。そんなマイちゃんを目で追いながら、入学からの6年間の出来事が走馬燈のように浮かびました。

入学式で椅子に座ってられず、床に寝そべりゴロゴロと転がり続けたこと。運動会の開会式での選手宣誓を堂々とこなしたこと。学芸会の和尚役で木魚を叩いている最中バチが飛び大ウケしたこと。マラソン大会を歩きながらも完走したこと。秋祭りの相撲大会で下級生に投げられ大泣きしたこと。テストの点数を職員室に自慢気に見

せに来たこと。そして、マイちゃんと手をつなぎながら毎日送り迎えをしていた母親が涙したあの日のこと……。

私は気づかないうちに、マイちゃんから勇気ややる気をはじめとして、いろいろな物ももらっていたことに気づきました。そして、学校事務職員は教授活動とは違う次元で子どもの成長を支え、しかも、その成長をつぶさを感じられる素晴らしい仕事だということであらためて感じました。

式が終わり、全校児童と職員、保護者らが玄関前で卒業生を待ち受ける中、卒業生が次々と現れ、その中にマイちゃんもいました。私の前を通過したマイちゃんに「中学校でもがんばってね」という声をかけると、「ありがとうございます」と答えてくれました。でも、本当に「ありがとうございます」と言わなければならなかったのは、間違いなく私の方だったのです。

■琴線に触れた教員のひと言 ～民主的な職場と学校事務

校長の怒声が職員室に響き渡りました。「事務職員は教育活動に関係ない！」。

事の発端はこうでした。職員会議で、ある教員が「今年の卒業式は給与支給日と重なっているが、多数の人が出入りをする式当日、学校に多額の現金があるのはいかがなものか？」と提案をしたのです。当時は給与の口座振替実施以前で、現金による給与支給が行われており、多くの学校で学校事務職員がその事務処理にあたっていました。

「卒業式までまだ数ヶ月あるし、日程を

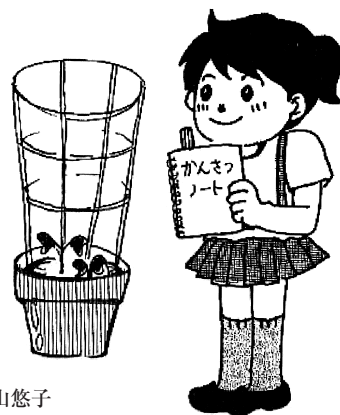
変更しても影響はないのではないか」「事故防止の面から、変えた方がよい」などの意見が相次ぎました。そして、司会をつとめていた教員が私に「北野さんも日程ずらした方がいいですよね?」と尋ねてきたので、「ハイ。いつもの時間帯で支給の準備をするなら、式にも出られないので……」と答えました。

日程の変更は簡単にできそうなものでした。保護者や来賓に案内を出す時期でもなく、教務係も授業時数には影響ないと断言していました。しかし、終始不思議そうな顔で論議を聞いていた校長が最後にこう言いました。「別に事務職員が卒業式にでなくてもいいだろう」——。静寂が職員室を包み込みました。

この学校に赴任し、はじめて同年齢の教員と職場をともにしました。彼の名前は西條。「西條先生」と呼ばれる彼に対し、私は「北野さん」もしくは「北野くん」。給与明細を眺めると、賃金の差は歴然としていました。これまでは、特に感じなかった教員との差を否が応でも感じるようになりました。

頭が切れ、仕事ぶりもスマートな彼に対し、私はいつしか羨望の念を抱くようになっていました。同時に、ひがみにも近い感情を抱き、日常の付き合いも意識して遠ざけるようになっていました。そんな自分の心がとつても小さく感じられ、嫌でなりませんでした。

半年が経った職場の懇親会でのこと、私たちは偶然隣の席になりました。すると西條がこう切り出してきました。「いや～



〈イラスト〉村山悠子
(札幌市立元町中学校教諭)

やっとな落ち着いて話せるね。北野さんと同じ年だって聞いていたけど、忙しそうで今まで話かけられなかったよ」。その言葉をきっかけに私たちは色々な話をしました。話をする内に彼も私のことを強く意識していたのがわかりました。そのことが妙にこそばゆく、これまでの自分の態度が恥ずかしくなりました。

懇親会の終盤、西條が言いました。「うまく言えないけど、やっぱり事務職員って学校に必要なよね。北野さんの仕事ぶりを見ていてあらためてそう思ったよ。教員ばかりじゃダメなんだよ。社会だって色々な職業で成りたっているのに、それを教える教員が一番そのことをわかっていないかもね」——。この言葉で私の彼への一方的なわだかまりは、跡形もなく消えました。

静寂が職員室を包み込みました。私は当時、教職員組合の分会役員であり、校長交渉の席で幾度となく意見をたたかわせていたので、「明かに当てつけだな」と判断しました。職員の多くもそう感じとったことでしょう。

そんな重苦しい雰囲気の中、西條が発言しました。「教員だけでなく、事務職員や用務員など全職員で子どもを育てています。卒業生の晴れの門出を全職員で祝福するのは当然ではないですか!？」。すると校長が堰を切ったように「事務職員は教育活動に関係ない!」と怒鳴ったのです。

私は「ついに言ったか……」という程度の思いで、反論をすることなく下を向いていました。日常の言動から、校長が職差別を持っていたことは薄々感じていたので、何ら驚きもしなかったからです。それより

も驚いたのは、その後数人の職員が立て続けに校長に対して激しく反論してくれたことでした。私にとってはそれだけで十分でした。

結局卒業式の日程は変更になりました。校長は「事務職員のために卒業式の日程を変えるなんて前代未聞だな……」という捨て台詞を最後に残しましたが、その台詞さえ遙か彼方に吹き飛ぶほど、少数職種をしっかり守ってくれる職場でのつながりを強く感じた忘れられない出来事でした。

『「教育としての学校事務」というのは、そういう意味では、教育をよいものにしておいて、教師をよいものにしておいて、そこへ事務職員が仲間入りをすることによって、自らの地位を、高めるということを意味しない。むしろ現実の教育がさまざまな矛盾と疎外を教育現場で持っているわけで、そういう教育の現実を変えていくという観点に立ちながら、そのなかで事務が持っている疎外関係を克服していく。これが、今日における教育事務である。

教育はいいものにしておいて、そこに、事務がくっつけば、学校事務の人間疎外もなくなるというものではなくて、教育そのものが問いかえされなければならない現実ですから、いかにいえば、「教育変革としての学校事務」そういうことになります。

皆さん方が「教育としての学校事務」というものを各現場で追求していくためには、おのおのが、現場にしっかりと足をおろして、そこにおける子どもの生きざま、親の生きざま、教師の生きざま、これを問いかえしながら、現在の教育を問いかえし、現在の教育の諸関係を変えていくという、そういう流れのなかに、学校事務をもう一度ぶっつけてみる。

学校事務の在り方そのものを、そういう観点に立って、もう一度問いかえしていくという、これが今日における「教育としての学校事務」の今日的課題であるというように私は考えているわけです。』

(1975年第25回全道事務研 持田栄一氏の講演より)

〈参考文献〉

- 第50回大会記念誌 北響（協議会誌 第5集）
／北海道公立小中学校事務職員協議会編（2000年）